

## にじ色の鳥

小一・つちや みつのぶ

むかしむかしあるところに、金の国と銀の国がありました。金の国には、金でできたおしろがあり、王さまがすんでいました。銀の国にも同じように、銀でできたおしろがあり、王さまがすんでいました。二つの国は、とてもなかがわるく、いつもたたかいばかりしていました。

ある日、二つの国のちようどまん中に、にじの色をした、ふしぎな卵がはっけんされました。まもなく、その卵から、にじ色の鳥がたん生しました。にじ色の鳥は、とてもうつくしく、人びとは、そのきれいな色に、いつも見とれていました。にじ色の鳥は大きくなりましたが、大きくなるにつれて、少しずつ、元気がなくなり、弱くなっていきました。

あいかかわらず、金の国と、銀の国は、なかがわるく、前よりも、せんそうがはげしくなりました。そこでにじ色の鳥が言いました。「てっぼうや、けんをつかってたかうのは、もうやめてくれないか。ぼくの心はもうつかれはてしてしまった。そこで、こんなのはどうだろう？　ぼくを元気にして、わらわせてくれた国が、このたたかいでかったことにするというのは。どうかね？」

二つの国の王さまは、この話をきいて、「よし！　われわれの国がかつぞ！」と、それぞれの町中の人をあつめて、どうしたら、にじ色の鳥をわらわせられるか、さくせんを

たてることにしました。

まずは、金の国のぼんです。おいしい料理をコックさんたちが作ります。スープ、サラダ、肉、魚、お酒、たくさんのごちそうを用意しました。そしてめしつかいが、にじ色の鳥にそれらを食べさせました。しかし、にじ色の鳥は、ぜんぜんわらいませんでした。つぎは、銀の国のぼんです。楽しいおさるのきよく芸を用意しました。さるつかいがステッキをふると、おさるがボールをあやつったり、でんぐり返しをして、見ごとなきよく芸を見せました。ですが、にじ色の鳥は、見むきもしませんでした。また金の国のぼんがきました。ゆう名なデザイナーにたのみ、めずらしい布でできた、うつくしい色あいのふくやぼうしをしたてあげ、めしつかいたちが、にじ色の鳥にきせてあげましたが、にじ色の鳥は、まだしよんぼりをつづけました。また銀の国のぼんがきました。少しは元気になってほしいと、森につれ出して、さんぼをさせました。森では、たくさんの動物たちが、にじ色の鳥をはげしましたが、にじ色の鳥は、何も話しませんでした。

けつきよく、たくさんのことをしましたが、どちらの国のさくせんもしっぱいし、二つの国の王さまたちは、こまりはててしまいました。

「どうしたら、いいのだろうか」とみんなが頭をかかえているとき、ある少年がやってきて、こう言いました。

「みなさん、ずっとしよんぼりしていても、いいことはありません。」

さあ、こんな時こそ、みんなで歌っておどろうじゃありませんか！」どこからともなく、音楽がながれ、歌う人やダンスをする人があらわれました。そして自然とみんなにえがおがもどりました。

にぎやかになったところで、ふと、にじ色の鳥を見ると、なんと

---

言うことでしよう。にじ色の鳥が、大きな羽を元きにはばたかせているではありませんか。そして、みんなのえがおにつつまれる中、天をあおいで

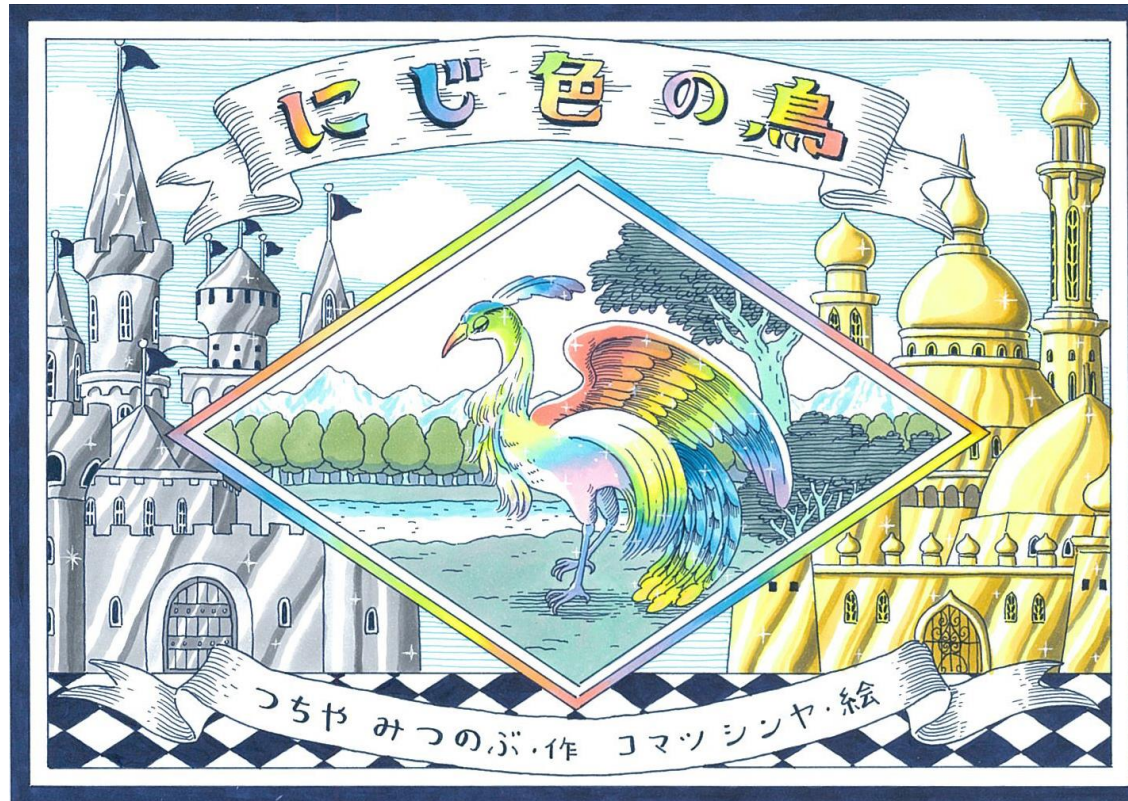
「わあーははははは」と大きく口をあけて大わらいしました。それを見た二つの国の王さまや、町の人たちは、おどろいて、それから大わらいしてしまいました。

「このしょうぶ、ひきわけですね」と金の国の王さまが言うと、

「もう、たたかいはやめて、おたがいなかよくしませんか」と銀の国の王さまも言いました。

そうして、二つの国がなかよくなった時、金と銀のおしろの間に、きれいなにじがかかりました。にじ色の鳥が、その空へむかってはばたいていくすがたを、みんなはえがおで見おくりました。それからというもの、二つの国はずっとなかよく、平和にぐらししました。

---



画：コマツシンヤ